

## MADONO レポートー2

2007年5月27日

5月21日(月)ホテルからアパートに移りました。場所はランカスター市の東(やや北寄り)端(ポストコード; LA1の東境界)です。大学はLA1の南東境界にあるので一旦市内へ出てそこからバスで大学に行きます。

### <新しい住まい>

私のアパートはいわば新開発地で、リビングがある東側は高い白樺の並木の先に緑の牧地が広がっています。3階建ての2階ですがこの白樺で残念ながら緑野一望とはいきません。こんな場所なのでバスもメインが走っておらず近隣住宅地内を循環する小型バスで市内へ出ます。ただこのバスは1時間に1本で時間もあまりあてになりません(5時が最終で、日曜日は無し)。街へ出るときは下りになるので歩いています(25分位)。帰りは辛抱強くバスセンターで待って帰りますが、時々循環方向が逆しか来ないことがあり遠回りして帰らざるを得ないこともあります(その場合料金が違う! ; 近い方は80ペンス(約200円)、遠い方は1ポンド10ペンス; 山手線も回り方で本当は料金が違うんですかね?)。このバスの主な乗客は住宅地に住むお爺さんお婆さんたちで、歩くのがやっという人も居ます(ちなみに年寄りもタダのようです)。そして住宅地内では自宅近くで乗り降り可能になっています。私はこの住宅地を出て、メイン道路に面したウィリアムズパークと言う、ランカスター市内からさらに湾を隔てて湖水地帯の山々(と言っても低い丘ですが)を望む(東端にあり西側が一望できる)小高い丘にある公園前で降り、そこから5分位歩きます。バス停からはやや下りで、東側に広がる牧野(なだらかに東へ高くなっていく)を眺めながら帰ります。このところ当地は天候がよく、遅い午後帰ると西にある太陽がこの野原を鮮やかな緑に染め上げます。

写真を添付できれば拙い説明が不要ですが、通信回線が電話回線のため(申し込めばブロードバンドも可能ですが、私の場合フルファーニッシュの部屋のため大家の許しで若干の工事?が必要なようです)時間がかかり残念ながら失礼します。また、ニフティの英国アクセスポイントがホームページ通りに動かず、定額制のアクセスポイントに繋がりません)。

### <電話加入>

今週もっとも手がかかったのは電話加入(電話機、回線はあるが番号をもらう)です。不動産屋からブリティッシュテレコム(BT)へのアクセス方法(自宅から150へ電話するだけで良い)を試みたが、返ってくる返事は「あなたのおかげになった番号は見つかりません。もう一度ご確認の上おかけ直してください」と言う録音が繰り返されるだけ。翌日不動産屋に出向き確認したところ、「0800(フリー); 800-150で繋がるからこれでやってみてください」。自宅で試したが結果は同じ。公衆電話から試すと初めに自動応答がありやっとうと人間と会話できるところまで辿り着くが、銀行口座や何やら問われて上手く話が繋がら

ない。やむなく翌日午前再び不動産屋に出向き、その場で試してもらおうと何と繋がることは繋がるが「こちらは大変ビジーです。申し訳ありませんがしばらくお待ちください。出来るだけ早くいたしますから」と言うメッセージが繰り返されるだけ。さすがに手伝ってくれた若い女性も大変さが分かってくる。結局 2 時間近くたっても繋がらず、一旦あきらめ午後再訪することにする。3 時過ぎに再度トライすると 15 分ぐらいでつながり不動産屋の助けを借りて何とか注文番号を取得するところまで行く。自宅に電話が無いので不動産屋を連絡窓口にしてもらい、48 時間以内に番号を連絡するという返事をもらい帰宅（これが火曜日）。

2 日後、木曜日大学へ出かけた後不動産屋に寄るが答えは来ていないとの返事。翌午後再訪と言うことでこの日も実り無し。

金曜日午後出かけるも状況変わらず。

夕食を済ませふと思立ち（ひょっとして回線は生きているが番号の連絡が無いだけではないか?）、電話をかけてみる。何とフリーダイヤルがかかる（時間外であることのテープが回っている）。早速インターネットを繋いでみる。繋がった！予想通り回線は 48 時以内に活かしてくれたのだ。しかし自分の番号は依然としてわからない！

土曜日（昨日）予定では番号確認に不動産屋に出かけることになっていたが、電話が通じているのでフリーで BT に繋ぎ（例によってビジーで大分待たされたが）注文番号を言い、番号を教えてくれるよう頼んだところ、住所・氏名など確認があったが不動産屋経由で手続きしたため直ぐに回答できないという（多分先方経由と言う意味だったようだがここがはっきりしない）。

今のところこちらからの電話は通じる（インターネットも）ので当面困ることは無い。しかし、二人の友人と英国人の友人から電話をかけたいとのメールが入っている。何とかならないか？不動産屋を煩わせたくない（本来彼らの仕事でない）。

来英する際携帯（ドコモ）を海外対応に更新しておいた。これはチョッと料金体系が複雑で英国内で使う場合、こちらがかける場合は滞在国内通話料、先方がかける場合は国際電話料金がかかる。そんな訳でこちらにきてから日本とのメール受送信にしか使わなかった。番号不明の固定電話から携帯にかければ着信記録が残るはずだ！この着信記録が私の電話番号だ！早速試してみた。分かった！今度は携帯から固定にかけてみた。チャンと固定に届いた！一件落着です（いまだに BT からは何も言ってきませんが）。

<ゼミが始まりました>

24 日（木）より研究ゼミ（と言っても当面僕の課題？に対応するためマンツーマン形式）。教授はマネジメントスクール所属、名前は Maurice Kirby、64 歳、家族は息子（独立）、娘（既婚）、夫人の 4 人家族。Maurice、Hiro と呼び合うことにしました。

既に来英前から何度か研究対象・計画に関してはメールでやり取りしているので、各種関連資料（と言ってもほとんど彼のペーパーですが）を 2 度目に会ったときに 4 種、今回 2 種くれこれを基にディスカッションしようと言うことになりました。内容は全て軍事 OR

の歴史（第一次大戦から冷戦まで）に関するもので当方の意向ともよく合っています（私の目的；「軍人（意思決定者）と OR 組織間の相互理解環境改善」と言う視点ではやや“歴史”そのものの力点がある）。

今回の資料は；1）第二次世界大戦における英空軍での OR 適用、2）冷戦下ワルシャワ軍対 NATO 軍の戦術核環境を第二次世界大戦のドイツ軍西部戦線電撃戦で英仏・独双方に戦術核が存在した場合どのような戦術展開が在ったかを冷戦時の戦術策定に使われた OR をベースに置き換えて検討する研究、です。いずれも私にとっては興味深いものですが、マネジメントスクールの教授としてどんな業績になるのか些か心配です。しかし、イギリス人（社会）の特質にアマチュアリズム尊重や道楽（興味のあること；競走馬、猟犬、バラなどの品種改良？探検などその例）にのめり込む傾向があることは、初期の OR 適用展開の重要な因子と考える私にとって彼自身が私の研究対象になってきそうです。

“毎週木曜昼食を挟んで 2 時半位まで”が私のための時間なので、研究室に 11 時過ぎ出向くと、「今日は 2 時半から学生の試験なので直ぐ飯にしよう」、とマネジメントスクールが経営者研修に使うホテル（最初に泊まったホテル）に行く（レストランではなく軽食も採れるバー）。「何か飲むか？」と問われたので、「じゃあコーヒーを」と言うと、「??私にはビールにするよ?」、「??（エッ!）、それなら僕も！（喜んで）」。と言うわけで 1 パイントの黒ビール（ビターと言う；John Smith's で Guinness より軽い）で“ゼミ”が始まる。「学校で昼間からアルコールは許されるのかい?」、「アルコールの問題はイギリス社会で大きな問題になってきている。かつてパブは夜しか開かず終了時間も 10 時位だった。だから自分の学生時代はラストオーダーの時間が迫ると急いで強い酒を飲んだものだ。しかし今では昼日中から午前 3 時頃まで飲める。由々しき問題だ（が）」、「学内には数箇所パブがありそこでいつでもビールは飲めるんだよ」。

この後は今回くれたペーパーを中心に真面目な話をする。

- ・著書完成までの苦労話（8 年を要している）。
- ・類似著書について（主として私の方から）。
- ・（私の）国立公文書館保存資料へのアクセスの可能性；第二次世界大戦に関してはほとんどのコピーが Maurice の研究室にあるのでいつでも見せてくれるとのこと。
- ・“戦術核と OR” は 7 月プラハで開催の「欧州 OR 学会」で発表する。また、11 月シートル開催のアメリカ OR 学会にも参加する。
- ・今日の試験の課題となる、陸軍 OR 組織が 1950 年代に始めたウォーゲーム（兵棋演習）教科書（写し；多分マイクロフィルム拡大コピー）の内容。
- ・OR の始祖とも言える、Blackett のこと；戦後ノーベル物理学賞（宇宙線研究）をもらう（これは知っていた）。思想的には“極左”で 50 年代アメリカ入国を拒否された！英国の原爆開発に大反対。これもあって原子力開発・利用に関してあらゆる関連情報から遮断された。ウィルソン労働党政権で返り咲く、など。Blackett については研究を進める上で最重要調査事項の一つなのでこれからが楽しみ。（この間彼は 1 パイントを飲み干したが全

く顔に出なかった。私はこの後不動産屋に寄る予定があったので 25%位で我慢した)

さて、支払いの段になりました。ビール、サンドウィッチとコーヒー二人分で 23 ポンド。「割り勘にしよう」と言ったところ、「今回は私が払うから次回頼む」と言うので任せる。しばらくカウンターで何やらやっていたが、席に戻ってきて「クレジットカードがテクニカルプロブレムで上手く処理できない」と言う。再度カウンターでバーテンと話し合っていたが、戻ってきて「ダメだ！Hiro 済まないが半分負担してくれ」と言うのでチップも含めて 25 ポンドとし 10 ポンドを私が負担した。帰路マネジメントスクールの建物を通り抜けバス停のある方まで送ってくれるので、「大丈夫だ。バス停は分かっているから」と言ったら、「いや金が無くなってしまった。ATM（現金支払機；振込み機能は無い）で金を下ろさなきゃならないんだ」つまり彼は 25 ポンド（約 5000 円）の現金を持ち合わせていなかったのだ！自動販売機は全く見かけないのに（唯一どこにもあるのは先払い制の駐車券を買う機械；ただしコインだけです）、街の至るところに ATM があり、いろんな人が並んで順番を待っています。彼らは現金が必要になると少しずつ下ろすのです。

まだまだ、失敗やビックリを数々体験していますが追い追いご報告します。

## MADONO レポートー3

2007年6月2日

### <マンチェスター>

話は少し遡りますが、初めての英国訪問で最初の宿泊地をマンチェスターに選んだのは以下のような経緯・背景からです。

先ず、日本からどのようにランカスターへ行くか？空路ロンドンに到着、そこから鉄道でランカスターに向かう。近くに適当な空港の無いランカスターではこの案が一番常識的と考えました。しかし、滞英経験者のホームページなどをインターネットで見ると鉄道の信頼性が極めて低い。時間通り動かない。予定の路線を走らない。代行バス輸送が途中に入り英国人でも混乱している等々です。加えてロンドン市内を大きな荷物を持って移動することの大変さ（ランカスター行きはユーストンと言う駅から出発する）。とても自信がありません。

ランカスター滞在者（留学生としてランカスター大に居たことのある人達）のホームページや投稿記事を見ていると、買い物（特に食材）などでマンチェスターへ出ることが書いてあります。この情報を基にマンチェスターを少し調べると“英国最大のチャイナタウン”があるとの情報に接しました。これでかなりマンチェスターを中継地として選ぶ気持ちになってきました。ではマンチェスターへどう行くか？マンチェスターからランカスターへは？英国訪問経験者の多くがロンドンヒースロー空港のトラブル（スーツケースを壊され盗難にあう）を語ってくれ、マンチェスターへ行くならフランクフルトかアムステルダム経由の方がましと助言してくれました。しかし、この案はディスカウント航空券の点で不利なことが分かりました。ヒースローの危険は覚悟で、ブリティッシュエアウェイズ（BA）で出かけることに決めたのです。

生活基盤が固まるまでしばらくレンタカーが必要と考えたのもマンチェスターを基点にしようとした理由の大きな要素です。マンチェスターの地図（国内では入手出来なかった）をインターネットのグーグルマップで調べるとランカスターへ繋がるM6(高速道路6号線)へ比較的容易に出られそうです（実は地図との違いは、市街地の広がりかと思っていたよりあったのと一方通行が多くM6へ出るのにチョッと迷いましたが）。

ヒースローでの到着は予定通りでしたが、国内出発便は発着便の混雑で離陸が一時間以上遅れで出発、マンチェスター空港へは7時過ぎに到着しました。ヒースローに次ぐ国際空港と言われていますが国内便で入ったため、ターミナルも小規模ですし成田で積んだ荷物（ヒースローで触られた感じもしません）も全くチェックなし（通関のカウンターも無いし人も居ない。ただ税関の事務所があり申告物のある人は自己申告）まるで日本のローカル空港へ降り立った感じでした。

マンチェスターは、一時はロンドンに次ぐ大都会（1930年代の70万人台が最高、現在は40万人強）でした。しかし、現在は製造業の衰退（英国全体に言える事ですが）で金融

業が比較的活発なようですが、世界的に名を知られているのはサッカーチーム（ユナイテッド）位でしょうか？

市の中心部は赤い石造りの中層ビルが多く、初めてイギリスを訪れた者にとっては充分“らしさ”を感じさせてくれます。私の泊まったホテルもこの造りで、これにロビーの広さと天井の高さ（そこにフロントが一人しか居ない！遅いチェックインなのでこのロビーにほとんど人が居ない）、さらにほの暗い照明が相まって“らしさ”倍増でした。

ホテルに落ち着いたならそれで終わりではありません。明日借りるレンタカー屋を特定し、ホテルまでの道を確認する必要があります。飛行機の遅れもありチェックインは午後 8 時頃でしたが緯度が高いので外はまだ明るさが残っています。フロントで確認するとレンタカー屋は徒歩で 15 分位とのことなので、早速薄暗い道をホテルでもらった地図を頼りに出掛け、簡単に見つけることが出来ました。ただ、一箇所工事中で一方通行のところがありこれを迂回する必要があることがやや気がかりな点です。

ホテルへの帰途中、くだんの赤い石造りの建物の一角に日本料理屋を見つけました。この日はほとんど飛行機に乗り詰めで、食事のサイクルが狂っているので食欲はありませんでしたが、駆け込み寺になりそうで何かホッとしました（と言ってもランカスターからは列車で 1 時間強あるのですが）。そして、その店の窓の一つに“**Japanese Super Market**”と書かれたネオンサイン見つけたので近くを巡ってみましたが結局見つけられませんでした。

翌朝初めての英国式ブレックファースト（と言ってもビュッフェスタイルですが）を済ませ、もう一つの重要課題、これからの食材入手のためのチャイナタウン探訪をチェックアウト前に行くことにしました。これもホテルから 2 ブロックのところにあることが分かり、朝の通勤の慌しさが残る街を教えられたとおりに出かけてみました。“英国最大のチャイナタウン” これから想像するのは、サンフランシスコやニューヨークのチャイナタウン、小規模でも横浜。しかし教えられた場所には石造りの中層ビルばかり。半順したところで少し狭い通りに入ると、見えました！あの赤い門が！マンチェスターのチャイナタウンは完全に英国式の区割り・建物の中に収まっているのです。外から見ただけでは“中華”の雰囲気はほとんど無いのです。しかも規模が極めて小さく横浜とは比すべくもありません。それでも 1 軒のスーパーに入ってみると中国食材を中心に東アジア（日本、韓国）の食材はほとんど揃っています。感激して日本米（10 キロ）、キッコーマンと味噌を買ってしまいました。本来ならレンタカーを借りてから来るべきなのでしょうが、道に自信が無いし駐車のことにも心配で、あとさき考えず買ってしまったのです。ホテルまでの道中が何と長かったことか！

これらの買い物とスーツケースをベルキャプテンに託し、昨夜確認のレンタカー屋に出かけ新品同様のプジョー 307（何と英国では珍しいオートマティック車）を借り受け、フロントでホテルまでの道を確認すると、昨夜気になった一方通行を避けるために予想もしない道を教えてくれ、これが一番簡単で確実だ！と言われ半信半疑でとにかく言われたルー

トをしばらく進みました。しかし、どうも左折が一本遅かったような気がして元に戻る道を探し始めるのですが一方通行が多く、やがて自分がどこに居るのか分からなくなって来ました。それでも何とか見かけた道に来たのですがことごとく右折禁止でどうしてもホテルに近づけません。やっと右折可の交差点へ来たのでホッとして右折したら直ぐに高速に入ってしまった。専用道路なので簡単には降りられません。覚悟を決めてしばらく高速を走り、最初の出口で一般道に出てホテル方面と思いき道を進んでいると大きなランナバウト（ランナバウトについてはいずれお話しすることになると思いますが、ローターリー式交差点です。自動車の運転は左側通行、日本と同じですがこの交差点だけは日本には無いので、英国をドライブする際の注意事項としてよく関連書籍などで説明されているほです）に来てしまいました。初めての体験です！しかし幸運にも、このランナバウトは昨日空港から乗ったタクシーで右折したものと瞬時に思い出し、その時この通行方法を注意深く観察していたのでその時のインド人ドライバーの車線の取り方を真似て何とかホテル方面へ向かうことが出来ました。

と言うような経緯で、マンチェスターに決めた狙いを予定通り実現しやっと 10 キロの米とランカスターへの道をとることになりました。

#### <マンチェスター・2>

5月18日（金）に新居借用契約が済んで直ぐレンタカーで例の米と荷物の一部をホテルから移動。部屋はフルファーマニッシュ（家具・調度品完備）とは言うものの消耗品はありません。しかし、食材以外はこの地のスーパーで揃います。問題は米・味噌・醤油以外の食材で、地元で用意できないものです。例えば麺や麵つゆ、非常時の即席麺、サラダも和風ドレッシングが欲しい等です。

そんなこともあり、19日の土曜日鉄道でマンチェスターへ出かけることにしました（この鉄道利用もいろいろ初体験がありますが他日ご報告しましょう）。

マンチェスターの中央駅とも言えるピカデリー駅は最初の滞在で大体の土地勘はついていました。駅からチャイナタウンがどの方向かが分かれば後は徒歩移動が可能です。それを確認して先ず出かけたのは前回滞在中で目にした“**Japanese Super Market**”です。今度は昼間なのでその看板が出ている日本レストランの周りを裏まで回って調べてみましたが、やはりそれらしいものはありません。昼食にはやや時間がありレストランに客も居ないようです。しかし、一応オープンしているようなので中に入ると和服を着た東洋人の若い女性が出てきたので、「この辺に **Japanese Super Market** があるようですがどこですか？」と英語で聞いてみました。答えは英語で「こちらの地下がそれです」と案内してくれました。つまりレストランとスーパーが併設されているのです。

地下へ降りると、有るわ！有るわ！一部キムチのような韓国食品も有るものの日本食材が何でも揃っています。客は私一人、無人だったスーパーに若い日本人の店員（関西出身の留学生）が出てきて対応してくれました。聞けば最近商品がまとめて入荷したとか。う

れしくなってあれこれ（梅干や青紫蘇ドレッシング、本つゆなど）を買い求めました。精算をする時、「このレストランの料理はどんなものかな？」と聞くと、「昨日は僕が当番でしたが、今日は誰かな？」、「???」。アルバイト学生の作る和食とは一体どんなものか？いささか心配でしたがここでランチにチャレンジしてみることにしました。

メニューには一品料理もあるものの、昼食はセットメニューで構成されており、寿司ランチだけはわれわれが日本で目にするものと変わらないものの、あとは例えば＜春巻き・味噌汁・鶏の唐揚げ・寿司・カツカレー・うどん・デザート（これで一人前！）＞がセットと言うようなものばかり。確かに外国で日本レストランに入ると見かけたことのある組み合わせです。店員にそれぞれのボリュームを聞くとなんとかなりそうだし、日本食にしばらくありついていないこともあり、これとサッポロビールを注文しました。料理はいつぺんに出てくるのではなく、春巻きと味噌汁でスタートの洋食スタイルです。鶏の唐揚げはいかにも余分なので「テイクアウトにしてくれるか？」と問うと直ぐに適当な箱を用意してくれました（この晩はまだホテル泊まりでしたから、これとビール・クロワッサン・果物・紅茶で夕食に代えました；これもかなり変なメニューですね）。寿司も何とか合格。カツカレーとうどんも量が控えめで味もマアマアと言ったところ。

帰り際に寿司を握っている（寿司だけは見えるところで握っている）黒 T シャツ・リーゼントの東洋人のところへ出かけると、「味はどうですか？」とかなり癖のある日本語で聞いてきました。話してみると日光・宇都宮方面のホテルや料理店で働いていた中国人でした。どうやらこのレストラン・スーパーとも経営者は中国人のようです（和服を着たウェイトレスも中国人だった）。

この日は結局これだけでマンチェスター訪問を終え帰途に着きました。

#### <東方食品店>

スーパーへ出かけると日本（あるいはこれに近い）の食材・調味料などがないかつい気になります。例えば、紅茶用やお菓子用の砂糖はあるが料理用が置いていません（何か黒砂糖のようなものはありますが）。また、米は結構有るものの例の細長い“外米（インディカ米）”ばかりです。ある時店員に聞いてみると、「それならバスセンター近くの **Chinese Super Market** に行ってみるといい」と言われました。しかし、なかなか見つからず道行く人に尋ねても誰も知らないと言います。しばらくその辺をうろつきまわっていると、有りました！<東方食品店>と漢字の看板を掲げた小さな店がタイ料理の店と併設されているのです。入ってみると店員の若い東洋系の若い女性が二人居るだけです。店を一巡すると中国・韓国・日本のものが量はそれほど多くないものの種類は結構あります。出前一丁（即席めん）、日本そば、豆腐、納豆、もちろんジャポニカ米も。この店へはその後時々出かけますが曜日・時間帯によっては若い東洋人（主として中国人）が大勢買い物をしています。聞くとほとんどランカスター大学の留学生で、彼らにとってもここは生命線のようなのです。

こんなわけで最低必要限のものは此処ランカスターでも確保できる見通しがつきました。

正直、食の面では中国・中国人の存在に救われています。日本人はこんな田舎まで進出する必要もないし、また独立して商売をする商才もありません（“みやび”という日本レストランが在るには在るのですが、ほとんど客の出入りがなくあまりポピュラーとは感じません；入ろうという気分にならない）。街の中心部には大きな中華レストラン“**Bamboo Garden**（竹園と漢字表記もある）”がありここでビュッフェスタイルの食事も出来ます。初めてここで食事をし、精算をする時女将さんと思しき女性に話しかけられ滞在の意図を話したところ、達者な漢字で「活到老、学到老」と書いて、「貴方のような老い方は中国人の理想ですよ」と励ましてくれました。あとでこのことを **Maurice** に話したら、「彼女はここのマネジメントスクールの卒業生だよ」との返事が返ってきました。彼らの異国・異文化への浸透力を改めて認識させられました。